

小学校の教科書における動物とのふれあいに関する描写と課題

柿沼美紀^{1)*}・野瀬 出¹⁾・畑 孝²⁾・米川秀彦²⁾・田口 諒¹⁾・小林福太郎³⁾・矢野英明⁴⁾

- 1) 日本獣医生命科学大学獣医学部
- 2) 杉並区獣医師会
- 3) 東京女子体育大学
- 4) 帝京大学小学校

Animals in Japanese textbooks: Interaction with animals are encouraged, but with some concerns

KAKINUMA Miki^{1)*}, NOSE Izuru,¹⁾ HATA Takashi²⁾, YONEKAWA Hidehiko²⁾, TAGUCHI Ryo¹⁾, KOBAYASHI Fukutaro³⁾, YANO Hideaki⁴⁾

- 1) Nippon Veterinary and Life Science, School of Veterinary Medicine
- 2) Sugunami Veterinary Association
- 3) Tokyo Women's College of Physical Education
- 4) Teikyo University Elementary School

諸言

文科省は平成29年告示の小学校学習指導要領解説—生活編—の中で継続的な動物飼育や動物との触れ合いを通して、動物が生命を持って生きていることや、自分との関わり方に気づく重要性を指摘している。具体的には、地域の獣医師会などとの連携の上でそのような活動を行うことも記載推奨されている。多くの自治体では獣医師会との連携でふれあい動物教室などが開催されている。

教育現場においては、主たる教材として教科用図書を利用している。本研究では、小学1・2年生の道徳科及び生活科の教科書の記述を分析し、どのような動物が取り上げられ、どのような関わり方を推奨しているかを検討する。

方法

平成29年度に検定を受けた小学校の道徳教科書48冊(1年から6年)と平成27年度に検定を受けた生活科教科書14冊(1年から2年)。動物を題材とした文章、動物と人の関わりに関する文章を抽出し分析した。

結果

教科書に登場する動物：生活科では145回、道徳

科では41回動物が登場している(図1)。

生活科の教科書では、身近な自然との触れ合いの中で動物が登場している。学びの内容としては、友達として、触れてみる、心拍を聴く、体の部分を観察するなどがあった。

道徳では、生命の尊さを教える項目での登場が多かった。1年生の教科書では「ハムスターのあかちゃん」が6社(全体シェア74.6%)で採用され「いのち」について考える内容となっていた。また、ウサギは、心拍を聴く、抱くことから生命の尊さを学ぶという状況で使われていた。

考察

両教科において、動物は自然との触れ合い、生命の尊さという項目で取り上げられている。登場する動物種はウサギが最も多い。生活科においては、ウサギ、モルモット、イヌが多い一方で、イヌと同じように身近なネコが少ないのは、教科の目的が触れることと関連している可能性がある。モルモットは道徳ではほとんど出てこない。表情が見えにくい、動きが少ないことから、子どもが感情を投影しにくいことがあるかもしれない。道徳教育においては、野生動物や家畜を用いて、生死について考えさせている。教科によって動物の果たす役割が異なっていることが伺える。

*連絡先：kakinuma-miki@nvlu.ac.jp

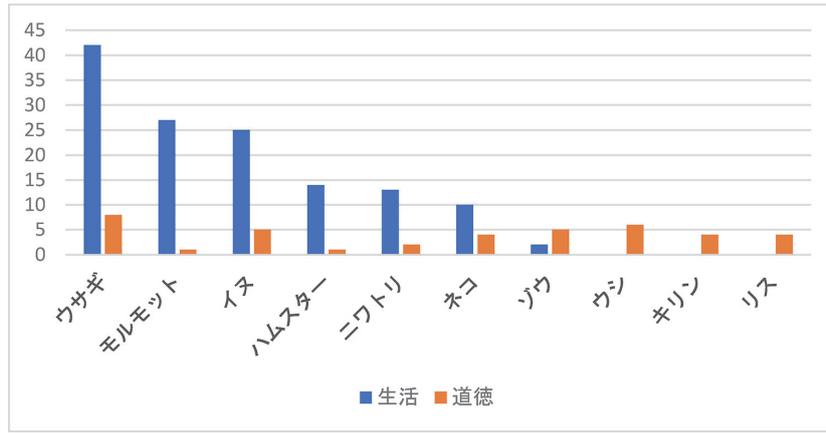


図1 各教科の教科書に出てくる動物の数



図2 触れ合いを推奨する例（東京書籍 どうとく 1年）。ウサギとの触れ合いに感動した子どもの様子が書かれているが、ウサギにとって抱かれることが負担になっている可能性については触れられていない。

文科省は長期の飼育を通して動物とふれあうことが望ましいとしている。また地域の獣医師会などとの連携でそのような活動を行うことも指導要領に記載されており、多くの自治体でふれあい動物教室などが開催されている。教科書に記載されているように触れる、抱く、鼓動を聴く活動は大切ではあるが、そのふれあいが、相手を思いやるといった情操教育に軸を置くのであれば、動物の立場にたった関わり方を教えることが求められる。

今後は詳細な分析を通して日本の教育における動物の役割を検討していく。

*なお、本論文に関して、開示すべき利益相反関連事項はない。